

【実践報告】

保育実習Ⅰにおける学内実習の実践報告

青井 夕貴, 森尾 恵里

【要約】 本学科では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、令和3年度の保育実習Ⅰ（保育所・施設）において、一部の学生に学内実習を行った。保育所実習における学内実習の内容は、保育現場で活用できる実践的な内容や模擬保育、今までの学びを振り返る等であった。施設実習の学内実習では、学生同士で議論し発表する機会、外部講師による講義・体験、レクリエーションの立案・実践を取り入れた。いずれの学内実習でも、学生は意欲的に取り組んでいたが、実践的な学びとしては限界があることも確認できた。今後は、事前事後指導の見直しや学内実習プログラムの充実、教育効果などについて検討していきたい。

キーワード： 保育実習Ⅰ, 学内実習, 保育所, 施設

1 目 的

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、令和2年度から保育士養成課程において学外での保育実習が実施困難となった場合、学内での代替が可能となった。そのため、全国の保育士養成校にて学内実習が実施されるようになった（川俣・山下・櫻井・永渕・井上, 2021; 堀・小嶋・野口・金子, 2021; 松居, 2021）。本学においては、令和2年度の保育実習を8・9月実施予定から2・3月に延期・実施となったが、履修者全員が学外での実習を実施することができた。しかし、令和3年度においては、延期での実施も難しくなり、学外での実習と学内での実習が混在する状況となった。そこで本稿では、令和3年度における保育実習Ⅰの実施経過および学内実習の内容について報告する。

2 保育実習Ⅰの概要

(1) 学内実習実施までの経緯

本学科では、保育実習Ⅰにおける保育所実習を2年生の8月に、施設実習を2年生の9月に実施している。令和3年度については、保育所実習期間中に県内の感染が急激に広がったため「実習中止」の判断を行い、それ以降の実習を翌年2～3月へ延期とした。しかし、2月になっても感染拡大は続き、一部の実習先から「受入困難」の判断があったり、学生自身からの実習への大きな不安が訴えられたりしたため、学内実習を実施することとした。担当者としては、可能な限り学外実習を確保したい考えもあったため、すべての実習を中止するのではなく、実習先や学生の状況を踏まえ、学外実習と学内実習の両方を実施することとした。

(2) 履修者

令和3年度保育実習Ⅰの履修者は、59名であった。保育所実習と施設実習の履修者内訳人数を表1に示した。保育所実習は、8月に「実習中止」の判断をした時点で実習中であった学生と全日程が延期となった学生がいた。そのため、「8月と2月に学外実習を実施した学生」「8月は学外実習を実施し、2月は学内実習となった学生」「2月から4月にかけて学外実習を実施した学生」「学外実習は実施できず、学内実習のみとなった学生」が混在することとなった。施設実習は実習開始前に中止が判断されたため、学外実習と学内実習の両方の対象となった学生はいなかった。

表1. 履修者人数

	保育所実習	施設実習
学外実習のみ	34 名	23 名
学外実習と学内実習	20 名	0 名
学内実習のみ	5 名	36 名

3 保育所実習の学内実習

(1) 実施期間とプログラム

保育所実習の学内実習は表2のようなプログラムで行った。学科内の教員（非常勤の教員も含む）にそれぞれのテーマで学内実習を依頼した。学外実習の代替ということで、保育現場で活用できる実践的な内容や模擬保育、今までの学びを振り返る等の内容であった。また、外部講師を招いて「プロジェクト型保育」という方法での保育についてお話いただいた。子どもたちの疑問から年間を通して展開していく保育の内容、地域とのつながりやその中での子どもの成長など写真を交えての具体的な話であった。乳児保育についても外部講師を予定していたが、新型コロナウイルス感染の関係で急遽中止となった。

表2. 保育所実習の学内実習テーマ

		テーマ
1 日目	1 限	基本的な生活習慣の習得と保育者のかかわり
	2 限	言葉を育む保育のための教材研究
	3 限	わらべうたあそびの実践
	4 限	子どもの主体性とあそびの展開
2 日目	1 限	子どもの発達理解と保育者の援助
	2 限	子どもの発達理解と環境構成
	3 限	子ども理解に向けた記録の視点と書き方
	4 限	保育記録と連絡帳の書き方
3 日目	1 限	全体的な計画と指導計画作成の意義
	2 限	全体的な計画を作成する（グループワーク）
	3 限	音楽表現活動のための教材研究と実践について
	4 限	障害児・気になる子の捉え方・かかわり方
4 日目	1 限	乳児のあそびと保育者のかかわり
	2 限	造形活動の実践と教材研究
	3 限	運動あそびの教材研究基礎
	4 限	運動あそびの教材研究応用
5 日目	1 限	自己評価の意義
	2 限	自己評価表を作成する（グループワーク）
	3 限	自然とのかかわりの実践について
	4 限	乳児をとりまく環境と家庭支援
事後課題	実習ノート「振り返りと自己評価」を記入して提出	

毎日の記録として、学外実習に使う日誌に一日のそれぞれの講義内容と感想を記入した。積極的な学びの機会にできるよう、必ず1日に1つ以上質問することを課題とし、質問内容と回答を

日誌に記入するようにした。

(2) 学生の様子や成果

1日4コマが5日間という学内実習を、学外実習のように集中して受けることができるのか、学外実習が突然中止になり学内実習になってしまったという学生が意欲を持って学びを実感することができるのかと不安もあった。しかし、保育所実習では、学内実習対象者のほとんどが学外実習を経験した上で学内実習を受けることになったため、学外実習を経験したからこそ、実習の重要性を意識しながら学内実習に取り組んでいたようである。学内実習の講義の内容について、園での子ども同士のいざこざや気になる子の姿、保育者のことばかけや援助等を思い浮かべながら理論を学んだことで理解が深まったという感想が多く、大きな成果となったと思われる。

(3) 担当者としての所感

今回は、結果的に学外実習と学内実習の両方を経験した学生が多く、より充実した学内実習になったことは、学生の感想や実習ノートの記述から予想以上であったと思う。やはり、実際に目にした子どもや保育者の姿をイメージしながら理論を学ぶことで、子どもや保育への理解が深まっていくということを改めて感じた。また、講義内容が実践的であり、保育の内容に特化した5日間で集中しやすい環境であったこと、学科教員の協力体制の基で効果的なプログラムが実施されたことにより、「学内実習も受けてお得だった」というような感想に繋がり、学生は学内実習での学びを実感できたのではないだろうか。

8月の学外実習後、学生からは「質問したいと思ったができなかった」、現場からは「わからないところは、積極的に質問してください」等のコメントがあったので、あえて必ず質問をして回答をまとめるという課題を出したが、講義終了後や授業中に質問する姿が多くみられた。それが、実習現場での積極的な質問する姿勢にすぐにつながるとは考えにくいですが、質問する意識を普段からもつことや回答やアドバイスが得られ知識が増える楽しさを味わう等のきっかけになってほしいと思う。

今後、学内実習のプログラムの内容として、部分実習の経験不足を補うためにも、総合的な活動（立案、実践、振り返りの共有など）が全員体験できる内容も組み込んでいけるよう考えていきたい。

4 施設実習の学内実習

(1) 実施期間とプログラム

施設実習の学内実習では、表3のようなテーマで実施した。初回には、学外実習向けに考えていた目的や心構えを再考し、学内実習への意欲を高めるようにした。可能な限り「実践」に近い

内容とするため、学生同士で議論し発表する機会や実際の様子を知ることができる映像、外部講師による講義・体験、レクリエーションの立案・実践を取り入れた。

外部講師には、3名を招いた。まず、ろう者の方からは、当事者としての過去や現在、未来への思いについての講話の後、簡単な手話も教えていただいた。障害のある子どもの保護者でもある障害者支援施設の施設長からは、自分の子どもへの思いや施設設立への経緯、障がい者福祉への思い、学生に対する思いなどについてお話いただいた。車いすバスケットボール選手からは、自身の障がいや車いすバスケットボールとの出会いとその魅力についての講話の後、実際に車いすバスケットボール用の車いすを使用して、簡単な動きを体験した。

その他の講義・演習等は、本学科では社会的養護や障がい者・児福祉等に関連する科目を担当する教員に限られており、学内実習の実施までに調整が難しかったため、施設実習および事前・事後指導を担当している教員1名がすべてを担当した。

さらに、学びを深めるための事前課題と中間課題を設定し、毎日の記録には学外実習で使用する

表3. 施設実習の学内実習テーマ

		テーマ
事前課題		「手話・聴覚障害」「知的障害・発達障害」についてのレポート
1日目	1限	実習の目的・心構え等の確認と再設定～目標の共有
	2限	障害のある子どもの理解と援助～聴覚障害
	3限	子どもの特性に合わせた支援～手話（外部講師）
	4限	聴覚障害のある子どもへの支援～まとめ
2日目	1限	障害児入所施設と児童発達支援センターの役割と機能～映像分析
	2限	障害のある子どもの理解と援助～知的障害・発達障害
	3限	障害のある子どもとその保護者の理解（外部講師）
	4限	障害のある子どもとその保護者への支援～まとめ
中間課題		「児童養護施設」についてのレポート
3日目	1限	社会的養護施設の役割と機能～課題の共有
	2限	児童養護施設で生活する子どもの理解と援助～映像分析（グループ）
	3限	児童養護施設における子どもの生活と環境～映像分析（発表）
	4限	児童養護施設における子どもの生活と環境～映像分析（全体）
4日目	1限	障害のある子どもを対象としたレクリエーションの立案・準備
	2限	障害のある子どもを対象としたレクリエーションの実践・前半
	3限	障害のある子どもを対象としたレクリエーションの実践・後半
	4限	障害のある子どもを対象としたレクリエーションの評価・反省
中間課題		「障がい者スポーツ」についてのレポート
5日目	1限	障害のある子どもの理解～肢体不自由（外部講師）
	2限	子どもの特性に合わせた支援～車いすスポーツ（外部講師）
	3限	施設における保育士の役割等
	4限	学びの総括
事後課題		実習ノート「振り返りと自己評価」を記入して提出

る日誌（一日の流れ、エピソード、考察など）を記入・提出するようにした。最終回では、ブレインストーミングを通して学びの総括を行った。

(2) 学生の様子や成果

ほとんどの学生は学外実習への期待が大きかった分、学内実習への不安や危機感を抱いていたが、初回に目標を再設定した後は「学外実習に行けないが、なんとか学外実習と同じくらい吸収したい」という思いに変わっていた。とくに、外部講師の講話・体験は、学生にとって初めてのことで新鮮な刺激になっていた。たとえば手話に関しては、「意外と覚えやすいものだった」「相手に気持ちが伝わると嬉しい気持ちになった」「自分から関わろうとすることを恐れないでいることが大切だ」などと意識を変えることができていた。車いすバスケットボール（写真1）では、実際に車いすに乗ることができ、実際に講師の自由自在に動く姿を見ることができ、学生は「楽しい」「もっと乗りたい」などと大興奮だった。車いすバスケットボールという未知の領域に対する壁がなくなった学生も多く、さらに「ルールや道具などを工夫することで、障がいの有無や年齢にかかわらず、安全にスポーツを楽しめることは保育にもつながる」と考察していた学生もいた。

また、グループワークを多く取り入れることも強調していたため、「能動的な意見交換をしたい」という目標をあげていた学生もいた。その目標の通り、グループワークでの議論は回を重ねるごとに活発化し、最終的にはブレインストーミングによって自分たちの考えを可視化することができた（写真2）。



写真1. 車いすバスケットボールの様子

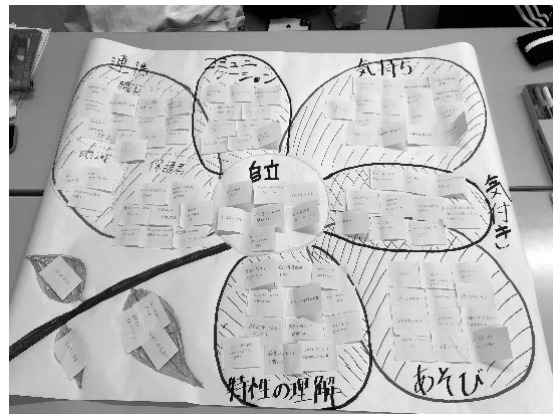


写真2. ブレインストーミングの結果

(3) 担当者としての所感

実習の最大の魅力である「子どもや利用者との出会い」がない学内実習を学生がどのように捉えて臨もうとしているのか、学外実習を受ける学生に近づけることはできるのだろうか等、担当

者としても手探りの状態で始まった。しかし、先述したように積極的に参加する学生の姿が見られ、担当者としては安心した部分もあった。中でも、手話や車いすバスケットボールは、これまで経験したことがない、かつこれからも意図しないと経験しないであろうと想定して設定した内容であったため、実践的な学びに近づけたと感じている。

また、学内実習では社会的養護や障がい児支援など多岐にわたるテーマを取り上げたため、視野を広げる機会になったことは利点だといえる。しかし、学外実習のように特定の施設種別に焦点をあてた理解の深化は難しい。藤原・宮下(2021)が指摘しているように、どのような工夫を行っても学内実習が学外実習の代替にならない部分があることを改めて感じた。今回は、やむを得ずの実施であったが、今後学内実習の実施が続くようであれば、実習施設との協同による学内実習(岡本・西村・光盛, 2021)などプログラムの内容や教育効果(堀・小嶋・野口・金子, 2021)について検討しなければならないだろう。

5 まとめと課題

今回は、学年全体で実習形態を統一することができず、学外実習と学内実習が混在することになった。やむを得ない事情ではあったが、このような方法が学生の今後の学びにどのように影響していくのか、注視していく必要がある。学内実習と学外実習での経験や学びを共有し、すり合わせていくために、事後指導のあり方を再度検討することも不可欠であろう。さらに、保育実習ⅡやⅢの選択次第では、保育所での実習を経験せず現場に出る可能性や、社会的養護施設や障害児・者支援施設を知らないまま保育士を取得する可能性がある。担当者としては、この点が大きな懸念事項であるため、卒業後の状況についても、これまで以上に把握できるよう努めたい。

引用文献

- 岡本晴美・西村いづみ・光盛友美(2021)新型コロナウイルス禍における学内保育実習の試み—児童福祉施設との協同—。広島国際大学医療福祉学科紀要, 16・17(合併), 73-94.
- 川俣沙織・山下雅佳実・櫻井裕介・永渕美香子・井上智史(2021)学外実習の代替となる学内実習の概要と展開: ICTを活用した保育現場との協働による学内実習プログラムの構築。中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 53, 157-165.
- 児玉珠美・太田美鈴・井出裕子・谷村和秀・服部壮一郎・山本辰典(2021)学内保育実習のあり方に関する実践研究。愛知学泉大学紀要, 3(2), 147-155.
- 藤原映久・宮下裕一(2021)保育士養成課程における学内での演習・実習の試み: コロナ禍における保育実習Ⅰ(施設実習)の代替として。島根県立大学・島根県立大学短期大学部教職センター年報, 2, 97-104.
- 堀由里・小嶋玲子・野口啓子・金子晃之(2021)新型コロナウイルス感染症対策に伴う保育実習学内プログラムの作成と課題。桜花学園大学保育学部研究紀要, 23, 191-199.
- 松居紀久子(2021)コロナ禍での保育実習(学内実習)の実践報告—障害者の生活支援を取り入れた取り組み—。富山短期大学紀要, 57, 106-116.